

日尾邦子『花月園謾筆』考

時 田 紗 緒 里

一 はじめに

日尾邦子（文化十二年（一八一五）～明治十八年（一八八五）は、歌人としてその名が知られる。または、日尾荆山（寛政元年（一七八九）～安政六年（一八五九年）の妻としても知られよう。

荆山は亀田鵬斎に師事し、漢学で著名である一方、清水浜臣に師事して国学にも通じていた。「源直麿」と号して和学に通じ、和歌の指導者の立場にあった。一門を対象に歌の稽古として年十一回、すくなくとも十年以上に渡って歌合を行っている。荆山は判者を務め、そこには邦子も参加して研鑽を積んでいた。この歌合については、福田安典氏「日尾荆山判『七十六番歌合』をめぐって」⁽¹⁾に詳しい。

さて、邦子の著作に『花月園謾筆』という随筆がある。本書は歌、歌語、歌人等、和歌に関わる事柄が並ぶ。取り上げる事柄は「歌に関わる」ということその他、共通点や法則性は見いだせない。また、序文、跋文もない。

書名に「謾筆」とあるとおり、邦子が興味の赴くまま歌に関わる事柄を書いたものと思われる。では、邦子の興味とは何に向かつて

いたのであろうか。

結論から言えば、邦子は歌語を巡る論考、訓詁学的な歌学の追究に興味が向いていたと思われるのだが、本稿ではまず『花月園謾筆』の内容を整理して、その全体像を示す。その上で、本書の性質と邦子の歌学について明らかにしたい。

二 『花月園謾筆』の書誌と構成

国立国会図書館蔵『花月園謾筆』（請求記号854.48⁽²⁾）は、邦子の自筆本で管見の限り孤本である。外題は『花月園謾筆 完』で、見返しに邦子とは異なる筆跡で「日尾邦子自筆 花月謾筆」とあり。全五十四丁、一丁十二行で書かれている。

まず一丁裏に、

嘉永二か年五月 今上御製

国ゆたか民やすかれといのる世に心ならぬはことくにのふね⁽³⁾

と、孝明天皇の歌が記されている。「今上」とあることから、本書の成立時期はまず嘉永二年（一八四九年）五月以降、孝明天皇の在

位した一八六七年までに成立したものと推定される。⁴⁾

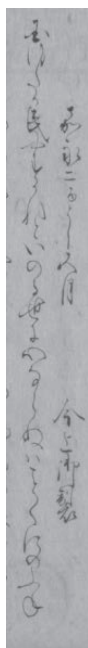
本書の内容は、記録を目的とするものと、歌語について邦子の見識や考察を述べるものとに分けられる。例を挙げて、その分類を示す。

記録を目的とするものは、三つに大別できた。

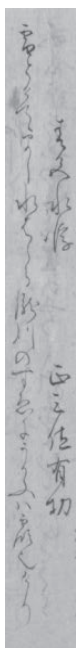
- ① 和歌を書き留めるもの
- ② ある題に沿った和歌を集めるもの
- ③ 歌人や歌に関わる書の内容を記すもの

まず「①」は、和歌、詠者、詞書き等が書かれ、特に掲載の理由がうかがえないものを挙げた。前出の孝明天皇や千種有功⁵⁾(書中「有功公」「正三位有功」など、邦子にとって同時代といえる人物の和歌は、実際に見聞きした和歌を書き残したもの、つまり記録を目的としたものと思われる(図1、図2)。

【図1】 二丁裏



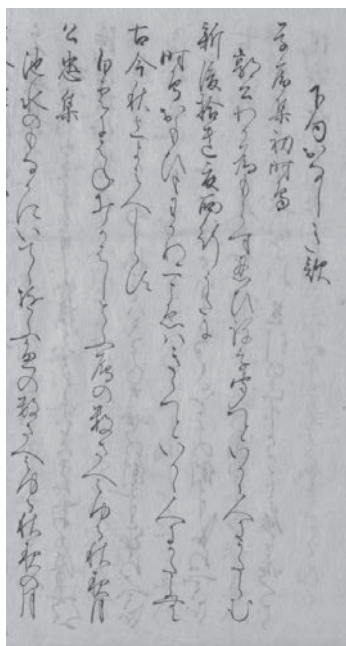
【図2】 十二丁表



「②」は、「下の句同じき哥」の項目で下の句がほぼ同一の和歌を列挙する(図3)。「下の句同じき哥」は、十二丁表冒頭から十四丁

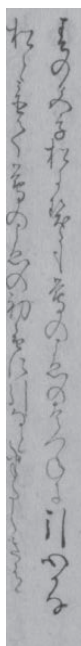
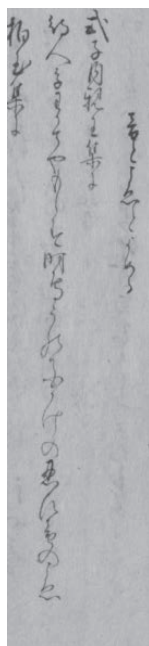
表の半分まで続く。

【図3】 十二丁表



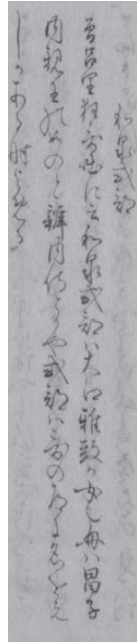
また、「鳥と声とよめる」(図4)等、歌題・歌語に沿った用例として和歌を挙げたものもある。

【図4】 二十七丁表、二十八裏



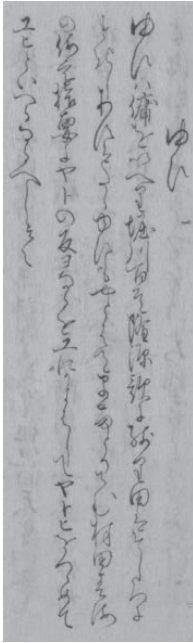
『花月園謄筆』に見られる書物の引用のうち、『曾呂里狂哥咄』⁶からの記述は、書物の内容の記録と見なして「③」とした(図5)。四丁裏半ばから十丁裏まで、和泉式部、小式部、紫式部、小侍従、藤原定家、西行、赤染衛門等、人物の伝や歌、また著作に関わる和歌について記載している。

【図5】 四丁裏

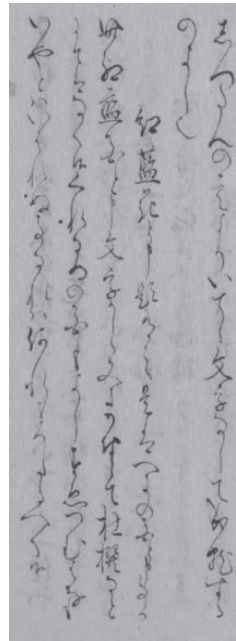


邦子が歌語について書く項目は、取り上げる語の配列には規則性がない。具体的には、まず書き方として邦子自身が題を掲げるもの(図6)と字下げで話題を変えて書き出すもの(図7)がある。

【図6】 五十二丁表



【図7】 三十五丁裏



書き方の違いについては、題を書く形式の箇所と、字下げで話題転換をする形式の箇所とで、書いた時期が異なる、といったことも考えられる。いずれにせよ、統一的な書き方、方針があるようには見受けられない。本書は緩く「歌」を共通項とした構成で、位置づけとしては和歌を題材として思いつく順に書き綴った「随筆」となる。

以上、本書の全体の構成を見てきたが、本書の大部を為し、単なる記録とは明らかに性質の違う、歌語について書く項目を詳細に見ていきたい。

三 邦子の歌語に対する言及の概要

邦子が取り上げた歌語を、頁順に挙げる。題を掲げているものはその題を示し、内容的に歌語について言及していると見なしたものは、話題としている歌語に「(」をつけて示した。また、それぞれの項目が書き出される丁数を「(」で示す。

- 1、恋にこやをよめる事（四十丁表）
- 2、しどけなし（十五丁裏）
- 3、夜白色草（十六丁表）
- 4、山たちばな（十六丁裏）
- 5、となり草（十七丁裏）
- 6、さてさす（十七丁裏）
- 7、霧しま山（十八丁表）
- 8、てけむ（十九丁表）
- 9、からをき（十九丁表）
- 10、すがら（二十丁表）
- 11、すはや（二十丁裏）
- 12、うけて（二十一丁表）
- 13、かぎわらび（二十一丁裏）
- 14、さやまき（二十二丁表）
- 15、かたそき（二十二丁裏）
- 16、二むら山（二十二丁裏）
- 17、わだつみのかざし（二十三丁表）
- 18、たゝへる（二十三丁裏）
- 19、春まけて（二十四丁表）
- 20、くた（二十四丁表）
- 21、やある（二十四丁裏）
- 22、棺（二十五丁表）
- 23、かるも（二十五丁裏）
- 24、山いぬ（二十六丁表）
- 25、鳩鶏（二十六丁裏）

- 26、かほよ鳥（二十六丁裏）
- 27、すて衣（二十七丁表）
- 28、からみ草（二十七丁裏）
- 29、玉まく（二十八丁表）
- 30、をしのふすま（二十八丁裏）
- 31、玉むすび（三十丁表）
- 32、鍾禮（三十一丁表）
- 33、〔芦手かきと歌絵〕（三十一丁裏）
- 34、〔わぎ歌〕（三十二丁表）
- 35、〔うけはりたる〕（三十二丁裏）
- 36、〔泡緒〕（三十三丁裏）
- 37、〔われもこう〕（三十四丁裏）
- 38、〔悉〕（三十五丁表）
- 39、〔紅藍花〕（三十五丁裏）
- 40、〔殯宮〕（三十六丁表）
- 41、〔うつたへ、うちはへ〕（三十六丁裏）
- 42、〔「己」と「巳」の字〕（三十八丁裏）
- 43、〔狭布の細布〕（三十九丁表）
- 44、ことりつかひ（四十一丁表）
- 45、礼序（四十三丁表）
- 46、をさゝが原（四十四丁裏）
- 47、ふる郷のさほ川（四十五丁表）
- 48、人をわかる（四十五丁裏）
- 49、袖つけ衣（四十六丁表）
- 50、なだ舟（四十六丁裏）

- 51、しのは草（四十六丁裏）
- 52、刀子（四十七丁裏）
- 53、嬢 郎女（四十八丁裏）
- 54、いかのぼり（四十九丁表）
- 55、せのうみ（五十丁表）
- 56、をかし（五十丁裏）
- 57、ゆひ（五十一丁表）
- 58、あからしび（五十一丁表）
- 59、こなた（五十一丁表）
- 60、吹刀自（五十一丁裏）

項目の長短は様々で、『万葉集』、『日本書紀』、『古今和歌集』、『新古今和歌集』、『新撰和歌六帖』、『堀河百首』などを引用しながら、歌の意味や由来、用例を挙げる。

「直麿云」、「直麿按」のように荊山の言に端を発した項目や、「或人」の歌に「直麿」が判じて述べたこととして挙げられる項目があり、邦子の歌学には荊山の影響が強くあることがうかがえる。

以上の歌語の項目の間に、所々本稿「二」で挙げた記録類が入る形で本書は構成される。前五十四丁のうち、かなりの丁が歌語を説明する項目であるため、歌学書としての側面を持っているといつて差し支えなからう。

四 邦子の歌学

今まで『花月園謾筆』の全体像を示してきた。最後に、邦子の歌語に関する項目について本文を引用して具体例を挙げる。

例一…出典不明（図8）

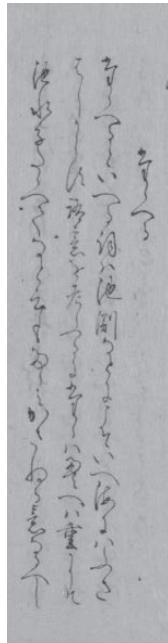
た、へる

「た、へる」といへる詞は、池渕などにこそいへ、海にはふさはしからず。

詠意を考ふるに、「た、」はたへは重りて、

池水をた、へてなど云も、た、みかさぬる意なるべし

【図8】



例一は、邦子の説明の由来が不明なものの例として挙げた。「たえる」（湛える）の用法として、海ではなく池や渕に対して使うものだということを述べるのだが、邦子にとって身についた知識であるものか、特に説明の根拠や出典を示さない。邦子にとって自明の歌語を改めて書き記すことの意味を考えると、邦子自身の備忘録というよりも歌学知識を伝えるべき第三者に向けて書かれていると考えるのが自然であろう。例えば、身近な一門の和歌学習者を読者対象として想定していたとも考えられる。いずれにせよ、体系的にまとめられていない点から、公のものという意識はうすかったと思われる。

次に、荊山からの言に端を発した歌語の項目を挙げる。

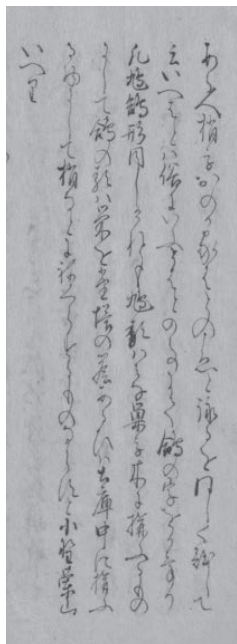
例二…荊山の言を引くもの（図9）

鳩鶏

ある人梢をおのが家ばとのこゑと詠るを、同じく（筆者注…荊山が）判じて云、いえばとは俗にいふどばとの事にて、「鳩」の字をかけり。

凡鳩鳩形同じけれども、鳩類はみな巢を木に拵ふるものにして、鳩の類は巢を堂場の屋あるひは古庫中に拵ふる物にして、梢などにねぐらすものならずとこれ巢山いへり。

【図9】



「ある人」が詠んだ歌で、梢と家鳩との取り合わせがよくない、との内容で、荊山の判を載せるものである。「ある人」とは、荊山が判を務める歌合に参加する人であろう。こうした歌合を通じて、邦子は歌学の知識を深めていき、心に残ったものを書き留めたものと考えられる。

もう一点、邦子が歌語の読み方について考察するものを挙げる。

例三…字訓（図10）

万葉集に有るに殯宮の字何とよむがよろしく候かな。

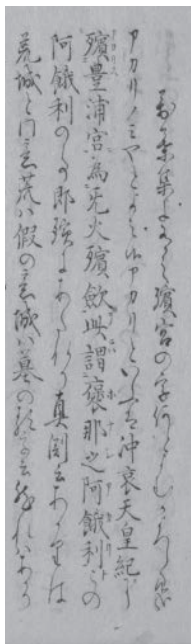
アカリノミヤとよみ候。アカリといふは仲哀天皇記に

殯宮豊浦宮、為无火殯斂。此謂褒那之阿餓利。この

阿餓利の事、即殯にあたれり。真淵云、あかりは

荒城と同意。荒は暇の意。城は墓の類を云。

【図10】



例三は、『万葉集』の「殯宮」の読み方について、『日本書紀』をもとに「アカリノミヤ」と読むのだと訓を示している。さらにその意味についての注は、「真淵」、賀茂真淵の言を引く。邦子の論考の精査は別稿に譲るとして、邦子が同時代資料から用例を引く、実証的な歌学の実践をしていることが確認できる。

五 おわりに

『花月園漫筆』は、随筆であるけれども邦子の歌学への興味がう

かがえ、歌学書としての側面を持つていることが明らかとなった。

邦子は日頃から荊山に師事し、書物にあたって歌学の知識を得て整理し、書き留めていた。また、歌合や歌作を通して学んだことも記している。

公に向けた書とは思われないが、書いた内容は自明な語にも及び、備忘録としてのみ存在するとは考えにくい。読者対象が想定されているとすれば、身内、すなわち荊山一門の和歌創作の一助として本書が成った可能性が指摘できる。

邦子自身の和歌が、一首も見られないことは興味深い。これを、邦子の関心が実作のための歌学に留まらず、歌語そのもの、歌学追求に向かつていたことの証左とみたい。

注(1) 福田安典氏「日尾荊山判『七十六番歌合』をめぐる」(『国文目白』第五十四号、二〇一五年二月)

(2) 日尾邦子『花月園漫筆』、写本。国立国会図書館デジタルコレクション
(<https://dlnd.sspg.jp/dl/2339700>) を用いた。

(3) 『花月園漫筆』本文引用の際、適宜濁点・半濁点、句読点を補った。
以下、本文引用は同様。

(4) 孝明天皇(一八三二―一八六七)は、第百二十一代天皇。在位期間は
一八四六年―一八六七年。

(5) 千種有功(一七九七―一八五四)は、正三位、左近衛権中将。公卿、
歌人である。歌は一条忠良と飛鳥井家に師事した。

(6) 浅井了意(一六一二―一六九二)作の仮名草子。

受贈雑誌(一)

愛知県立大学説林

愛知県立大学国文学会

愛知大學國文學

愛知大學國文學會

愛文

愛媛大学法文学部国語国語文学

会

青山語文

青山学院大学日本文学会

愛媛国文研究

愛媛国語国文学会・愛媛県高等

学校教育研究会国語部会

愛媛国文と教育

愛媛大学教育学部国語国文学会

大妻国文

大妻女子大学国文学会

大妻女子大学草稿・テキスト研

大妻女子大学草稿・テキスト研

究所研究所年報

究所

大阪大谷国文

大阪大谷大学日本語日本文学会

香川大学国文研究

香川大学国文学会

学芸国語国文学

東京学芸大学国語国文学会

學習院大學國語國文學會誌

學習院大學國語國文學會

學習院大学大学院日本語日本文

學習院大学大学院人文科学研究

学

科日本語日本文学専攻

學鑑

丸善

金沢大学国語国文

金沢大学国語国文学会